が成り立っているかの如き印象を与える。maisonnée, clan, lignage の相互関係についてもあまり触れていない。しかし、こうした点は本書のモノグラフィ—と言う性格からして必然的な欠点と言えるかもしれない。また、本書では苗語の term を豊富に使用するため、第 1 章の初め及び最後に補遺として苗語についての簡単な解説がある。この大部分は「中国少数民族語言簡志・苗語語族部分, 1959, 科学出版社」からの引用であり、何ら目新しいものはないが、苗語を漢蔵語グループの一つとした点、また音韻論の分野で、鼻音終止についての解釈に関する問題など、多少疑問の残る点もないとは言えない。

なお、著者 Jacques Lemoine 氏はフランス CNRS (国立科学研究所) の研究員として長期に亘りラオスに滞在し、現在も現地で調査研究に従事している。これまでに苗及び傣族についての幾つかの優れた論文を発表している。

〔新谷 忠彦〕

(連絡先 Takahiko Shintani, Maison de Norvège, 7 Bd. Jourdan, 75690, Paris, Cedex 14, France)

Etudes Vietnamiennes

No. 15. Régions Montagneuses et Minorités Nationales en R. D. du Vietnam.

Hanoi, 1967.

No. 32. Données ethnographiques. (1)

Hanoi, 31971.

ヴェトナムがフランスの支配下を離れ

と共に、その少数民族、特に北ヴェトナムに於ける少数民族についての資料は殆ど入手できなくなった。然るに、近年 Etudes Vietnamiennes としてハノイで出版されているシリーズの中の No. 15 及び No. 32 には、北ヴェトナムの少数民族の実態及びその民族学的研究情況が紹介されていて大変に興味深い。

ヴェトナムに於いて、少数民族はその占有する面積の大きさと逆には、殆ど歴史の中には登場して来ない。こうした点から見れば、ここで紹介されている経済、文化、工業等あらゆる分野に亘る少数民族の地位向上への努力とヴェトナム民族との間の交流の促進などは、歴史上画期的な事であろう。本書では、ヴェトナム独立運動の中での少数民族の果たした役割とその変遷、また多数の少数民族の中からタイ、バンキウ、ザオ (傜), ミュオンについての民族誌及びその現状が紹介されている。残念ながら、本書は一般大衆向に書かれたものであって、その内容は必ずしも専門的に高度なものとは言えない。しかし、とにかく少数民族の現状を知るためには好適な書物であろう。また戦時下にもかかわらず、その研究が休みなく続いている様子もうかがえ、今後の研究成果の発表に期待したい。

〔新谷 忠彦〕